

Title	韓国農村の人口定着に関する環境計画的研究
Author(s)	金, 益煥
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/35914">https://hdl.handle.net/11094/35914</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	きむ	い	ふ
	金	益	煥
学位の種類	工	学	博 士
学位記番号	第	8182	号
学位授与の日付	昭和63年3月25日		
学位授与の要件	工学研究科環境工学専攻 学位規則第5条第1項該当		
学位論文題目	韓国農村の人口定着に関する環境計画的研究		
論文審査委員	(主査) 教授 東 孝光		
	教授 紙野 桂人 教授 末石富太郎		

### 論文内容の要旨

本論文は、過疎化が進行しつつある韓国の農村地域において、人口の定着をはかる方途を探る目的で、定住主体である住民と地域の居住環境との係わりに着目し、住民の農村定住態度および居住環境評価の構造について分析したもので、序章、本論2部6章および結章からなっている。

序章では、本論文の背景として、韓国における都市化および過疎化の進行とそれがもたらしている問題点について考察し、そのうえで本論文の目的およびその環境工学上の位置付けについて論じている。

第I部は、3つの章からなり、韓国における農村空間の実態および住民の定住実態について論じている。

第1章では、農村空間の展開と農村の社会的変容および農村定住環境の特質を把握し、今後の農村計画の課題および計画の視点について示している。

第2章では、韓国慶尚北海の農村を対象に、20の指標を設定し、韓国農村の類型化を行ない、各地区の特性を分析している。本章で抽出される地区類型は、次章以下の考察における地区事例選定の基準となっている。

第3章では、農村および都市住民の居住歴パターンを抽出し、その居住歴の過程における農村居住の位置付けについて明らかにしている。

第II部は、3つの章からなり、韓国の農村における住民の居住環境評価と定住意識について論じている。

第1章では、住民の居住地志向と農村定住意向について検討を加え、農村および都市のプル・プッシュ要因に係わる地域環境条件を明らかにするとともに、農村の定住条件および今後の農村における可能な

定住主体について明らかにしている。

第2章では、農村および都市の居住環境に対する住民の相互評価の構造を分析し、農村の本質的かつ内在的環境条件および定住推進のための環境計画要素を明らかにしている。また、居住歴別に評価構造を分析し、その傾向から今後の農村定住主体の位置付けをより詳細に考察している。

第3章では、農村の地区類型別に居住環境評価を行ない、各地区ごとの評価構造を明らかにした上で、地区類型別に定住推進のための環境計画要素を抽出し、環境整備計画の課題を明らかにしている。

結章では、前章までの考察をふまえ、今後の農村定住主体を規定し、そのうえで先に提起した計画要素に関してその整備計画の方向と手法について提案している。

### 論文の審査結果の要旨

本論文は、過疎化が進行しつつある韓国農村を対象に、農村・都市の定住およびそれらの間の移動主体である住民の居住環境評価に着目し、居住歴と環境評価との関係や地域類型と環境評価との関係などについて、定住推進のための環境計画要素を抽出しさらにそれに基づく農村環境計画の方向を明らかにすることを目標として分析したもので、その主要な成果は次の通りである。

- (1) 居住環境に対する評価パターンは居住歴によって異なった傾向を示し、その中で農村から都市に出てきた「農村転出者」の農村居住環境に対する評価は高く、また一時都市へ出て再び農村へ帰った「農村帰還者」が積極的な農村定住意向をもつことより、これらの人々が将来の農村定住主体となり得ることを証明している。
- (2) 農村居住環境に対する評価は全般的に都市住民が農村住民よりも高く、また都市住民は「緑の豊かさ」という自然的環境条件を、農村住民は「近所づきあい」という社会環境条件を高く評価しており、さらに将来の農村における定住性の向上の方向は「生活利便施設の整備」と「就業機会の確保」のふたつに集約され、前者は都市住民がより強く求める農村定住条件であり、後者は農村住民がより強く求める農村定住条件であることを明かにしている。
- (3) 農村定住環境の実態を示す20の統計指標を用い「都市近郊部農村」「都市化進行部農村」「平地部停滞農村」「山間部過疎化農村」の4つの主要な農村類型を抽出し、それぞれの類型に該当する農村住民の環境評価構造から、農村類型別の環境整備課題を明らかにし、それに基づき整備の基本的方向を示している。
- (4) 以上のまとめとして、これまでの韓国における農村整備施策の評価および日本の農村整備の展開との比較考察をふまえた上で、韓国における将来の農村整備に関する基本的な考え方をまとめている。

以上のように本論文は農村整備の課題が多く、また環境計画研究が極めて少ない現状にある韓国の農村計画に重要な知見を与えるとともに、都市・農村の相互環境評価の対比を通じての分析の方法はわが国における将来の地域計画の方法論の新しい展開を示唆するものであり、環境工学上寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。